

〈 野 菜 〉

積雪による施設の倒壊に備え、早めに支柱や針金で補強をしておきます。

また、効率的な保温のため、外張り資材の損傷部分、カーテンの合わせ目や裾部分も隙間がないようチェックします。

○ ホウレンソウ (寒締め栽培)

- ・ 12月上旬までに20cm程度の草丈を確保することを目安に管理します。生育が進んでいる場合はハウスサイドや入り口を開けて換気を行い、遅れている場合は不織布等のトンネルかべたがけを行い保温します。なお、べと病が出やすい時期であることから、保温の場合でも常時密閉は避け、ハウス内の湿度を高めないように換気を行います。
- ・ 草丈が24cm (Mサイズ) 程度になったらハウスサイドを開けて寒気にさらします。寒締め開始から数日は低温に対する慣らし期間として、昼にハウスサイドをわずかに開放し、夜間は閉めます。寒さに慣れてきたら昼の開放幅を徐々に広くし、夜間も解放したままにします。
- ・ ホウレンソウは寒さに強く、日数をかけて寒さに慣らすと-20℃でも大丈夫ですが、寒さに慣れないうちは-5℃でも凍害を受けることがあります。凍害を受けると葉柄の表皮剥離や葉心の黄化により商品価値が下がります。段階的に寒さに慣らすことが大切です。

○ アスパラガス (促成栽培)

- ・ ハウス内の温度管理は、日中20～25℃、夜間は10℃以上確保することを目標とします。気温が25℃以上になると先端が開きやすく、8℃以下に低下するとアントシアニンが発現し紫色となります。換気は、25℃以上にならないように行いますが、ハウス内に急激に冷たい風を入れると生育ムラや穂先の曲がりの原因となるので注意します。
- ・ かん水は、根の周囲の目土の乾き具合を見て行い、日中の気温が上がってからかん水するなど、出来るだけ地温を下げないようにします。また、乾湿の差が過大にならないよう、少量多回数のかん水方法で管理します。

○ 山ウド

- ・ 根株伏せ込みの際は、芽土(根株の株間に充填する土)に十分かん水し、水分を保持させることが大切です。伏せ込み中に水分不足になると萌芽が途中で停止したり、細い茎や肌の変色等を招き品質が低下します。
- ・ 伏せ込み中は電熱線や温湯ボイラー等で加温し、芽が動き出すまでは芽の付近の温度を20℃、芽が動き出したら18℃前後で管理します。また、保温対策としてトンネルの二重被覆並びに二重カーテン等の使用も必要です。
- ・ 冬期間でも晴天の日はハウス内が高温になり、腐敗を招く場合がありますので、カーテンの開閉や換気等によるこまめな温度管理が大切です。

〈 果 樹 〉

○ 雪害対策

- ・ 幼木には支柱を立て、主幹部と側枝は縄などで結束し、主幹部からずり落ちないようにします。ある程度、積雪が多くなったら天気の良い日に消雪材（市販資材やくん炭など）を樹冠の周囲に散布し、雪害の軽減を図ります。
- ・ 若木や成木は、積雪前に雪が乗りやすい徒長枝などの粗せん定を行います。水平に近い主枝や亜主枝、過去に雪害を受けた骨格枝は、雪害を受けやすいので、支柱を立てるなど補強します。樹に雪が積もったら、雪が軽いうちに雪下ろしを実施します。

○ 野ねずみ対策

- ・ 積雪前に殺そ剤をねずみ穴へ投入し、園内の野ねずみ密度の低下を図ります。殺そ剤は、処理前日にねずみ穴を踏み固め、翌日、開いた穴に投入すると効果的です。
なお、忌避剤を使用する際は、農薬使用基準を遵守して実施します。
- ・ 主幹を保護するために、根雪前に金網、ビニール(厚さ0.1mm以上)、杉葉、合成樹脂のプロテクターなどで、地際部から地上約1mまで被覆します。ビニール製の肥料袋は凍害を助長する場合がありますので、凍害に弱い樹種（もも、うめなど）には使用しません。
- ・ 樹幹の根元の周りは敷きワラや草を取り除いて清耕状態にし、野ねずみの住みにくい環境を作ります。
- ・ 2月上旬以降、樹幹周囲の雪が緩んだら、雪を踏み固め、野ねずみが食害しにくくします。

○ 整枝・せん定の実施

- ・ ぶどうのせん定は、積雪の多い地域では、積雪前に大まかな仕上げせん定、積雪の少ない地域では、粗せん定作業まで行い、雪が樹や棚に乗らないようにします。
- ・ 日本なしのせん定は、園地整理等を終えてから徐々に行います。特に、骨組みと側枝のバランス、主枝及び亜主枝先端部の強化、側枝の更新、樹冠中央部結果枝の確保、樹勢の維持強化に留意します。

○ 園地の整理

- ・ 脚立や雪害防止目的以外の支柱等は、撤収し、収納庫に整理します。
- ・ 生育期に隣接樹と枝の交差により受光態勢の悪い園地では、樹の縮伐や間伐を行います。

〈 花 き 〉

加温が必要な品目や作型では効率的な保加温を心がけ、低温性の品目などは十分に換気をして品質向上に努めます。また、天気の良い日はハウスの換気を行い、湿度の低下に努めます。

○ キクの親株管理

- ・ 天気の良い日はハウスの換気を十分行って湿度を下げるるとともに、地際部の傷んだ葉やカビが発生している葉を取り除きます。

- ・ かん水は、土壌表面が乾いている時に株元へかん水し、茎葉にかからないようにします。
- ・ 親株管理中の薬剤散布は白さび病の予防を中心に、天気の良い日を選んで定期的に行います。葉が濡れている時間が長いと発生を助長するため注意します。

○ デルフィニウムの越冬管理

- ・ 2番花の収穫に備え、切り残した茎や古葉は病虫害の発生源となるので整理します。ロゼット化した株の2番花は奇形花となりやすいため、最初の抽だいは取り除き次の抽だいを促します。
- ・ 収穫終了後、一定期間低温に遭遇させてから加温すると2番花が揃って抽だいます。このため、1番花の収穫が終わったら切り残した茎や古葉を取り除き、ハウスを開放して低温に1か月程度遭遇させます。この時、凍らせないことと開放期間を2か月以上にしないことがポイントです（開放期間が2か月以上になると、抽だい後に過剰生育し、商品価値が低下します）。

○ フリージアの管理

- ・ ハウス内の最低気温を5～7℃に保ち、日中の最高気温は20℃以上にならないよう換気します。日中の高温は、花下がり^{（下向き）}の原因となるので注意します。
- ・ フラワーネットは、地際から草丈の3分の2の位置になるよう随時上げていきます。

○ ダリアの分球

- ・ 発芽点は球根と茎の間の膨らんだ部分（クラウン）にあるため、分球の際は各球根のクラウン部分に発芽点が少なくとも1つ以上あるようにすることが必須となります。
- ・ 球根に残っている細い根はあらかじめ取り除いておきます。球根からさらに球根が出ているものは、発芽点がないため切り落とします。
- ・ よく切れるハサミや小刀（片刃）を使用し、茎の中心にハサミを差し込み6～4つに割り、発芽点になるべくクラウンの中央部に来るように切り分けます。
- ・ あまり芽の近くに切り口があると、乾燥によって芽が枯死してしまうことがあるので注意します。
- ・ ハサミや小刀は1株ごとに消毒します。
- ・ 分球した球根は半日～1日陰干して切り口が乾いたら、木箱やダンボールの箱におが屑^{くず}やバーミキュライトなどを詰めて入れ、フタはせずに暖房のない家や小屋の中等で5～10℃で保存します。

〈 畜 産 〉

○畜舎の換気と敷料管理

- ・ 冬期は家畜の風邪や呼吸器の疾病が発生しやすい時期です。防寒等のため畜舎内を密閉すると、ふん尿等から発生するアンモニアガスが鼻の粘膜などの防御機能を低下させ、ウイルスや細菌に感染しやすい状態となりますので、天気の良い日は積極的に畜舎内の換気につとめます。
- ・ 寒い時期の敷料の管理は特に重要です。牛は比較的寒さに強い動物ですが、冷たい風が直接

牛体に当たったり、牛床の汚れにより腹部を冷やしたりすると、子牛では下痢の発生、肥育牛では体調不良、発育停滞の原因となります。敷料が乾きにくい時期ですので、早めの追加や交換を心がけて、牛がゆっくり寝られる状態を保ちます。

- 子牛の寒さ対策として、カーフジャケットの利用も効果的です。市販されていますが、古くなった毛布や古着を利用して簡単に手作りできますので、子牛の防寒対策に積極的に活用します。

○子牛出生時の事故防止

- 子牛出生時の事故の多くは、人が見ていない時に生まれてしまい、必要な対処が遅れることによるものです。特に冬場のお産では子牛の体温がすぐに低下してしまいますので事故につながりやすくなります。分娩予定日を記録しておき、予定日の2週間くらい前から分娩の兆候をよく観察するようにします。特に「義平福」の産子は大きい傾向にあり難産の可能性もありますので兆候を見逃さないようにするとともに、分娩予定日を過ぎても兆候が現れない場合は獣医師に相談します。
- 初乳を生後できるだけ早期に子牛へ給与することにより、移行抗体が多く免疫能が高まることから、生後2～6時間以内に飲ませることが重要です。子牛が初乳を飲むまで見とどけるか、母牛の乳房のしぼみ具合や子牛の口に白い泡が付いているかなど、確実に飲んだことを確認します。また、子牛が自力で初乳を飲めなかったり、初産などで出産に興奮して子牛に乳を飲ませない場合がありますので、人工初乳を常備しておくようにします。

(お問い合わせ先)

秋田県農林水産部園芸振興課

TEL : 018-860-1801 FAX : 018-860-3822

E-mail : engei@pref.akita.lg.jp